人間文化創成科学論叢　第22巻　2019年

昭和初期における長崎の「ぶらぶら節」と西條八十の接点
―「民謡の旅」の記事を中心に―

安　原　道　子*

Nagasaki's banquet song (Ozashiki-uta) "Burabura-bushi" and Saijo Yaso's involvement in it in early Showa period：
with special respect to his newspaper article series "Travel through folk songs"

YASUHARA Michiko

Abstract

Burabura-bushi is a folk song that has been inherited as banquet song ("Ozashiki-uta") in Nagasaki until today. It was first mentioned in July, 1930, in Osaka Asahi Shinbun newspaper in an article series "Travel through folk songs" by Saijo Yaso (which namely includes his documentary article "Burabura-bushi in Nagasaki"). This newspaper covered the regions west of Osaka, which rendered the song enough known to a prominent number of its readers in West-Japan. This event was followed by the issuing of two of the song's record discs in the following years: one in September, 1930, and the other in May, 1931, both performed by Nagasaki's Geishas. The recording companies were Nipponohon and Victor respectively, both of which were the nationalwide companies in disc production industry. These facts contributed to the song's coming out of the closed ambience of banquet room to get diffused to a larger public by means of disc and radio medias and to consequently get wider popularity among people in whole Japan.

This thesis has as its object to analyse which effect Saijo's encounter with the song had on the historical process of inheriting it by focusing on his above mentioned newspaper article.

Keywords：Burabura-bushi, Kenban, Saijo Yaso, Travel through folk songs,
record production in early Showa period

1．はじめに

長崎の「ぶらぶら節」は、昭和５（1930）年９月に長崎町検番に所属する凸助[でこすけ1]の唄・一二[いちじ2]の三味線で「長崎ぶらぶら節」としてニッポノホンから、昭和６（1931）年５月に長崎東検番に所属する愛八[3]の唄及び三味線で「ぶらぶら節」としてビクターからレコードが発売されたが、第二次世界大戦後の資料では、「ぶらぶら節」は愛八の唄として認識されていた。また、「ぶらぶら節」という独立した唄としての名称は、昭和３（1928）年までに発刊された文献においては見当たらず、「やだちゅう節」の替唄として扱われていたが、発売されたレコード及び昭和５年７月に西條八十による「民謡の旅」（『大阪朝日新聞』連載）の記事では「長崎のぶらぶら節」という独立した唄として取り上げられている。

本研究の目的は２点ある。１つは、「ぶらぶら節」が愛八の唄として記憶されるようになった一因になったと思われる、西條八十と「ぶらぶら節」の接点について、資料を整理することである。もう１つは、「ぶらぶら節」

キーワード：ぶらぶら節，検番，西條八十，民謡の旅，昭和初期のレコード発売

＊平成28年度生　比較社会文化学専攻

が替唄ではなく、独立した唄として知られるようになった過程について整理することである。

2．対象資料

本研究の目的を整理するにあたって、西條八十「民謡の旅」と２つの「ぶらぶら節」のレコードを対象とする。

2-1. 西條八十「民謡の旅」と「ぶらぶら節」の接点

西條八十の民謡行脚が記録された資料として、以下の４点を用いる。

１点目は、昭和５（1930）年７月10日から８月４日までの26回、『大阪朝日新聞』朝刊の１面に（内１回のみ２面に掲載）毎日連載された西條による「民謡の旅」の取材記事である。西條は、昭和５年の夏、６月28日から約１ヶ月間、大阪朝日新聞の委嘱で画家古家新と共にひろく西日本にわたる民謡行脚を試み、その旅さきから日々書き送った取材記事が連載された。記事には、毎回取り上げられた民謡に関する挿絵が古家新によりつけられている。

２点目は、上記新聞「民謡の旅」の連載記事が昭和５（1930）年10月に大阪朝日新聞社から発行された西條八十著『民謡の旅』である。著書は、新聞連載記事の順番・内容と一致しているが、挿絵は26回連載された中から10枚が載せられている。この著書の「序」には、西條自身によって次のように書かれている。「この紀行それ自身は最初から紙数に制限があったがため、私がこの旅によって聚集し得た材料の殆ど僅少な部分しか盛っていない。（中略）しかし、それは他日、私の手許に残った資料を一層大きな形に纒めるとき、十分補い得ると信ずる」（西條，1930：序）。

３点目は、1993年に国書刊行会より発行された『西條八十全集14』（童謡・歌謡・民謡論）に収められた「民謡の旅」である。内容は上記の連載記事および発行された著書と同じであるが、旧仮名遣いが新仮名遣いに改められ、挿絵は載せられていない。「民謡の旅」の解題と解説が森一也氏によって記載されている。

４点目は、1975年に中央公論社から発行された、西條八十の長女西條嫩子による評伝『父西條八十』である。上記「民謡の旅」に関することや、八十の民謡への取り組みについて西條嫩子の視点で記されている。

2-2.「ぶらぶら節」の２つのレコードと長崎の「検番」

2-2-1.「ぶらぶら節」の２つのレコード

レコードレーベルには、２つとも「俚謡[4]」と表記されている。しかし、大正３（1914）年に文部省から刊行された《俚謡集》には、「ぶらぶら節」は収録されていない。昭和３（1928）年までの文献では「ぶらぶら節」は、「やだちゅう節」の替唄として扱われている（安原，2016）。従ってレコードが発売された時点は、「ぶらぶら節」が１つの唄とみなされた時期であることが分かる。

１つ目のレコードは、昭和５年９月にニッポノホンより発売された「長崎ぶらぶら節／港節」（唄：凸助、三味線：一二、ニッポノホン盤17633：宮川密義氏[5]提供）である。昭和５年２月13日の『長崎新聞』３面に、「凸助と一二が東京日蓄で長崎俚謡のレコード吹込みの為長崎発列車で出発した」ことが記事になっている（安原，2016）。

２つ目のレコードは、昭和６年５月にビクターより発売された「ぶらぶら節／濱節」（唄及び三味線：愛八、ビクター盤51665：宮川密義氏提供）である。発売したレコードが『ビクター・レコード新譜目録［月報］５月号』の「曲目の解説」に取り上げられている。この愛八「ぶらぶら節」は、国立国会図書館の歴史的音源で、愛八「長崎ぶらぶら節」という名称でインターネットでの視聴が可能である（安原，2016）。

２つのレコードでは、それぞれ５節の歌詞が収録されているが、その中で共通する歌詞は２つのみであり、歌詞の配列は異なっている。

2-2-2. 長崎の「検番」

レコードを発売した凸助と一二は町検番に、愛八は東検番に所属している。長崎の「検番」に関して、『長崎市史 風俗編（下）』（古賀；長崎市役所編，1925）には、大正期の長崎市の６つの「検番」が掲載されている。

その中で「町検番」と「東検番」が規模の大きい代表的検番であり、お互いに芸を競い合い、中央から師匠を招いて芸の研鑽を積んでいた[12下線参照]。

「町検番は、明治40年４月１日に、長崎市の料亭の主人たちを中心に創設されており、大正14年町検番所属の芸妓は77名である」（古賀；長崎市役所編（下）1925参照）。掲載されている大正14年６月町検番芸妓一覧表には、若手に凸助、中年に一二の名前が見られる（古賀；長崎市役所編（下）1925：150-152参照）。

「東検番は、明治42年８月１日に、長崎市の料理屋主人や芸妓置屋の代表者が幹事となって創設したものであり、大正14年東検番所属の芸妓は177名である。掲載されている大正14年６月東検番芸妓一覧表には、中年増として愛八の名前が見られる（古賀；長崎市役所編（下）1925：153参照）」。

３．替歌から独立した唄となった「ぶらぶら節」

「ぶらぶら節」の歌詞は、現在歌われている歌詞と同じものが、昭和５（1930）年のレコード化以前に発刊された文献に見られるが、「やだちゅう節」の替唄として扱われており、歌詞は数多く存在し、歌詞の配列が固定化されていない唄であった。また、凸助のレコードで１節目に唄われ、現在常に１節目に歌われる「長崎名物はた揚げ盆祭り　秋はお諏訪のシャギリで　氏子がぶうらぶら　ぶらりぶらりと　いうたもんだいちゅう」（下線筆者）の歌詞は、レコード発売以前の文献には見あたらない。

「ぶらぶら節」の起源に関しては、町田佳聲が次のように記載している。「長崎花柳界で謡われてきたのが「ぶらぶら節」である。この唄は八九八四八という奇妙な詩型に〈ぶらりぶらりというたもんだいちゅ〉の七八という特徴ある囃し詞がついている。（中略）「ぶらぶら節」の元唄は、「やだちゅう節」で、而も既に嘉永年間には丸山で謡われていたとみてよいだろう」（日本放送協会編『日本民謡大観 九州篇（北部）』1977：286）。そして、前述した現在１節目に歌われる歌詞については、「今日謡われている長崎名物づくしの歌詞は、ひょっとするとこのレコード化のために整えられたのかも知れない。しかしもう今となっては確たる資料もなく、推測の域を出ないのである」（日本放送協会編『日本民謡大観 九州篇（北部）』1977：286）。

「ぶらぶら節」が、昭和５年にレコード化される以前に発刊された文献は、以下の２点である。

１点目は、古賀十二郎[6]編纂の『長崎市史 風俗編（下）』（古賀；長崎市役所編，1925）があげられる。この文献の「俗謡」の項において、「長崎の名所、名物、年中行事、事件其他特異をうたう唄も勿論ある。この種の唄にして今なお普く行われているのは概ね嘉永以降のもので、中には明治に入りて作られたのも亦多少ある。」（古賀；長崎市役所編，1925：342）との記述に引き続き、現在も歌われている「ぶらぶら節」の歌詞が５節載せられている。上記文献において、他に掲載されている唄は、曲名が書かれているが、ここでは、「ぶらぶら節」という曲名はつけられていない。

２点目は、本山桂川[7]の『長崎花街篇』（1927）があげられる。「嘉永前後にかけて長崎独特の「やたちゅう節」が流行た[ママ]。此の節は可なり気持ちよく長崎のローカル・カラアを示している」（本山，1927：254）という書き出しで、現在「ぶらぶら節」として歌われている５節の歌詞が載せられているが、「ぶらぶら節」という曲名は見られない。

さらに、昭和５（1930）年９月に凸助の唄による「長崎ぶらぶら節」のレコードが発売される直前の歌詞資料として、大阪朝日新聞連載［西條八十］「民謡の旅」（『大阪朝日新聞』朝刊，1930 年７ 月27 日，１ 面）に載せられた「九州　長崎のぶらぶら節」という記事がある。記事に載せられた歌詞は、次項4.に掲載する。

筆者の調査の限りにおいては、「ぶらぶら節」が文献、資料において独立した唄としての曲名が初めて見られるのは、大阪朝日新聞に連載された西條八十の「民謡の旅」（『大阪朝日新聞』朝刊，1930年７月27日）の取材記事「長崎のぶらぶら節」である。

４．西條八十「民謡の旅」と「ぶらぶら節」の接点

4-1. 西條八十「民謡の旅」

西條八十が大阪朝日新聞から委嘱されて行脚した「民謡の旅」の目的は、「各地方に古くから知られ、埋もれ

たまま残ってゐる民謡を一々親しく聴いて、その特質をひろく世に紹介することに在った」（西條，1930：序文）、とあり、取材した地域は、朝日新聞大阪本社版販売エリアの北陸、山陰、四国および九州の福岡、長崎、熊本、大分であった。

昭和５（1930）年７月９日に、西條八十一行は長崎市を訪れている。民謡行脚による取材記事は７月10日から８月４日までの26回毎日同紙の１面に連載されている（内１回のみ２面に掲載）。その連載26回中18回～21回に長崎県の民謡が取り上げられており、「ぶらぶら節」はその筆頭に紹介されている。西條一行が訪れた地域と取り上げた民謡を、新聞連載の順番に従って一覧表を作成した（表１）。

以下は、1930年７月27日１面「民謡の旅18　唐人鐵砲――九州長崎のぶらぶら節、西條八十、古家新（畫）」（画像１）に書かれた内容である。

民謡の旅

唐人鐵砲―

九州　長崎のぶら〜節

西條八十　古家新畫

画像１　「民謡の旅18（唐人鐵砲）」『大阪朝日新聞』朝刊，1930年７月27日，１面.

「（前略）盂蘭盆[8]が二三日中に迫ってゐるといふので、子供らがいちはやく玩ぶ唐人鉄砲の爆音がをりをり車上のわれらを驚かせる。やがて私たちは唄を聴くために料亭富貴楼に上った。（中略）席にはこの地方の民謡吹き込みで知られているレコード芸妓凸助（下線筆者）その他の喉自慢が私たちを待ってゐた。

嘉永年間に流行したといふ「ぶらぶら節」が、復興して今日長崎で盛に唄われてゐる。調子は二上がり。「芝で生まれて神田でそだち・・・」といふあの江戸唄によく似たふしである。

〽（１）遊びに行くなら、花月か中の茶屋、梅ぞの裏門たたいて丸山ぶうらぶら、
　　ぶらりぶらりというたもんだいちう。

この唄のなかの固有名詞は当時の料亭の名。花月は例の玄宗皇帝の鶴の枕を蔵してゐるので、なかでも有名である。但しこの由緒ある家も時代の流れには勝てず、今は売物に出てゐるさうな[9]。「・・・といふたもんだいちう」は「・・・といったもんだよ」または「・・・といったもんさ」ぐらゐの意味である。

〽（２）紙鳶揚げするなら、金比羅、風がしら、帰りは一杯機嫌で、瓢箪ぶうらぶら、
　　ぶらりぶらりといふたもんだいちう。（中略）

〽（３）大井手町の橋の上で、子供の凧喧嘩、世話町が五六町ばかりも二三日ぶうらぶら
　　ぶらりぶらりといふたもんだいちう。（中略）

〽（４）今年や十三月、肥前さんの番がはり、四郎が島見物がてらにオロシャがぶうらぶら、
　　ぶらりぶらりといふたもんだいちう（後略）」（『大阪朝日新聞』朝刊，1930年７月 27日，１面.）。

4-2. 西條八十「民謡の旅」と「ぶらぶら節」の接点

この「民謡の旅」連載18回目の記事（本稿4-1.）では、「ぶらぶら節」の歌詞が４節、唄の背景も併せて記事全体の半分近くを使って書かれているが、取材時に誰が歌ったのかは書かれていない。連載19回目の記事には、以

表１　西條八十「民謡の旅」大阪朝日新聞朝刊の連載記事

西條八十「民謡の旅」連載記事：1930年７月10日－８月４日『大阪朝日新聞』連載「民謡の旅」：朝刊１面				
新聞掲載日	『大阪朝日新聞』朝刊			
昭和５年		連載番号	新聞見出し	小見出し
７月10日	【北陸】	1	まづ能登半島へ	七尾まだら（上）
７月11日		2	「武勲の歌」の俤	七尾まだら（下）
７月12日		3	菅笠の律動舞踊	麥屋節と平家をどり（上）
７月13日		4	スイートな哀傷	麥屋節と平家をどり（下）
７月14日		5	古典的な哀謡の揺籃地へ	平村を訪ふ（上）
７月15日		6	人形山に盲娘の亡霊	平村を訪ふ（中）
７月16日		7	仙境に迫る文化の力	平村を訪ふ（下）
７月17日		8	『蟋蟀橋』（こおろぎ）	山中節と鐵砲猪踊
７月18日		9	港の唄	明るく艶な三國節
７月19日	【山陰】	10	山陰路へ	三國港の白波を後に
７月20日		11	始祖は鍼医者	スポーツと安来節の一挿話
７月21日		12	孤島隠岐へ	どっさり節（上）
			可憐の娘が愛墓の唄	
７月22日		13	磯辺の唄声	どっさり節（下）
			武士を島にたとへて	
７月23日		14	伐られた松	歌踊『關の五本松』
			隠岐から美保ヶ関へ	
７月24日		15	黄金の小鈴	月下の『津和野踊』
			美保ヶ関から津和野へ	
７月25日		16	吟んだ武人の妻	維新節とヨイショコショ節
			維新の揺籃地で老妓米八を聴く	
７月26日	【九州】	17	九州を探る	博多節と黒田節
			▽女性的な『博多節』	
			▼男性的な『黒田節』	
７月27日		18	**唐人鉄砲**	**長崎のぶらぶら節**
７月28日		19	炭坑の唄	高島節・長崎甚句・新地節
			なぐれやお春やん	
７月29日		20	雨の雲仙で聴く	
			山麓に残る港の唄「はいや節」	
７月30日		21	蘇った古謡	
			「バラ」もつて拾ふた唄の数々	
７月31日		22	想出の唄	皮肉な嫁入唄「ノシコラ」
			熊本から竹田へ	素朴な農民歌
８月１日	【四国】	23	四国路へ	一般化した伊豫節とヨサコイ節
				方程式のような讃岐の舟唄
８月２日		24	労働歌の魅惑	阿波農村の古謡「藍こなし唄」
				淡路を探って更に紀州へ
８月３日	【紀州】	25	渦巻く黒潮	串本節の変轉を聴く
８月４日	最終	26	旅一千里	最後に聴いた興味深い歌と踊
				鯨とりの唄と長刀踊

昭和５（1930）年『大阪朝日新聞』より安原作成

下のように書かれている。「なほまた長崎芸妓がよく歌ふものに「長崎甚句」がある。（中略）「長崎ノンノコ」（二上り）といふのもある。（中略）そのなかで興味のあるのは「新地節」である」（『大阪朝日新聞』朝刊，1930年７月27日，１面）。この記事に登場する「長崎ノンノコ節」、「長崎新地節」、「長崎甚句」は、西條一行が長崎を訪れているときに、凸助・一二の演奏でニッポノホンからレコードが発売されている最中であり、人気を博して

いることが、地元新聞で報じられている（『長崎日日新聞』昭和５年７月10日）。

凸助の「長崎ぶらぶら節／港節」のレコードは、西條一行来崎後の同年９月に発売されている。京城日報1930年９月５日（夕刊）にも「イーグル・レコード《長崎ぶらぶら節》外」の広告が載っている。「長崎ぶらぶら節」の歌詞は、レコードには以下の５節が吹き込まれている（資料１）。

（資料１）：凸助のレコード「長崎ぶらぶら節」（昭和５年）の歌詞

１．長崎名物はた揚げ盆祭り　秋はお諏訪のシャギリで　氏子がぶうらぶら　ぶらりぶらりと
　いうたもんだいちゅう
２．遊びに行くなら　花月か中の茶屋　梅園裏門たたいて　丸山ぶうらぶら　ぶらり（以下同上、中略）
３．紺屋町の橋の上で　子供の旗喧嘩　世話町は五六町ばかりも　二三日ぶうらぶら　ぶらり（中略）
４．紙鳶揚げするなら　金比羅風頭　帰りは一杯機嫌で　瓢箪ぶうらぶら　ぶらり（中略）
５．今年や十三月　肥前さんの番替り　城ヶ島見物がてらに　俄羅斯がぶうらぶら　ぶらり（中略）

しかし、取材記事では本稿4-1. にあるように、1. 遊びに行くなら～、2. 紙鳶揚げするなら～、3. 大井手町の橋の上で～、4. 今年や十三月～、の４節の歌詞が載せられている。取材記事の４節の歌詞は、昭和５（1930）年に発売された上記レコードの歌詞とほぼ同じであるが、レコードで１節目に歌われた歌詞は記載されておらず、歌詞の配列も異なっている。このことは、「ぶらぶら節」は、レコード発売以前は歌詞や歌詞の配列が固定化されていない歌であったことを示している。現在、１節目に唄われる歌詞は、凸助のレコード「長崎ぶらぶら節」の１節目に唄われた歌詞である（資料１）。歌詞に関しては永島正一[10]によれば、「現在定着している歌詞およびその配列は、昭和５（1930）年にレコード化されたものと大多数同じであるが、これはレコードができてから自然にそのような順序になってしまったものである」（永島, 1997：103,1972：56）とのことであるが、現在も１節目以外は、凸助のレコードに収録されていない歌詞が選択されていることもある。

西條八十は、取材時に長崎の音楽事情や社会情勢をかなり把握していたが、連載20回目の記事冒頭に、長崎の知識を得るために郷土史家の渡邊庫輔[11]が協力していることが記載されている（西條, 1993：311）。

ところで、長崎市の芸妓たちが所属する代表的な検番は東検番と町検番である（本稿2-2-2）。昭和５（1930）年に西條八十が「民謡の旅」で取材した料亭富貴楼は町検番の料亭であり、凸助は町検番に所属している。翌昭和６（1931）年に「ぶらぶら節」のレコードを発売した愛八は東検番に所属しており、「民謡の旅」の取材記事には登場していない。西條が長崎取材で出会った芸妓は凸助であり、凸助の「長崎ぶらぶら節」は発売直前である。

一方、愛八は昭和６年５月にビクターから発売し、ビクターの［月報］と称される「新譜目録」の解説で紹介されている。そして、その解説には前年に西條八十が長崎で取材した「長崎のぶらぶら節」の記事の一部が紹介文として用いられている（画像２）。

「長崎ぶらぶら節」として先にレコード化したのは凸助、一二であるが、昭和46（1971）年に宮川氏が「ぶらぶら節」には２つのレコードが存在することを明らかにするまでは（宮川；長崎新聞社編, 1975）、「ぶらぶら節」は愛八と結び付けられて記憶されてきた。ただ、昭和８（1933）年NHK長崎放送開局記念番組に長崎県の各検番が出演しているが、その中で、凸助、一二が所属している町検番の演奏曲目として「ブラブラ節[ママ]」が演奏されている。この開局記念番組にはレコード吹込みをした凸助、一二、愛八の三者ともに出演している。また、昭和10（1935）年11月30日のNHK京城放送の長崎俚謡で、町検番芸妓衆による演奏で、「ブラブラ節」他が放送されている。これらの記録は、昭和10年の時点では、「ぶらぶら節」は凸助が所属する町検番のレパートリーとして演奏されていたと考えられる。

なお、愛八や凸助に対する市民の認知度に関しては、郷土史家の宮川氏によれば、以下の指摘がある。「当時の時代背景を考慮すべきだと思います。芸妓は花柳界の人であり、そこに出入りするのはお座敷で芸者遊びに興じる裕福な殿方ばかり。一般市民は民謡を聴くとしても、全国的な流行歌とは違って、どの芸者の歌かなどに関心は無く、レコード時代になってもレコードや蓄音機を買い求める階層も一部。やがてレコードが普及し始め、ラジオ放送が庶民の生活に浸透するようになって、歌い手の芸者にも少しずつ関心を抱くようになったと思います（新聞のラジオ欄などで）」（宮川メール, 2015b）。

ドーコレ（クツニオフソルオ）ータクビ

B A 濱ぶら〳〵節（俚謡）（五一六六五）

長崎　愛八

嘉永年間に流行したといふ「ぶら〳〵節」が、今日復興して長崎で盛に唄はれてゐる。調子は二上り。『芝で生れて神田でそだち……』といふあの江戸唄によく似たふしである。

〈遊びに行くなら、花月か中の茶屋、梅ぞの裏門たゝいて丸山ぶらぶら、ぶらりぶらりというたもんだいちう。

この唄のなかの固有名詞は當時の料亭の名。花月は例の玄宗皇帝の鶴の枕を藏してゐるので、なかでも有名である。

「濱節」は東京の所謂「濱唄」に似た感じを持つてゐるやはり長崎獨特の民謡の一つ。

愛八さんは齢既に六十を過ぎた老妓であるが、その華やかだつた時代には、長崎が佐世保に近い關係上、海軍方面の現在有名な方々や、三菱關係の人々の宴席に侍べる事數知れず、而もその美麗と藝熱心と俠氣とは、今に至るまで變らず、現在長崎の一名物と云はれてゐる。今度偶然の機會から御上京を願ひ、吹込を願つたものである。（西條八十著―民謡の旅より）

画像２　曲目解説：「ビクター・レコード（日本物）第三十八回新譜目録（昭和６年５月）」

昭和初期は、一般市民はまだ誰が演奏者であるかにはそれほど関心がなく、種々の事柄が重なる中で、ビクターの曲目解説での紹介とも合わさり、その後、「ぶらぶら節」の唄い手として愛八が記憶される要因に繋がったと考えられる。

4-3. レコード化以降の凸助と愛八の音楽活動

愛八は、昭和６（1931）年にレコード化した時は54歳であったが、発売されたレコードがビクター〔月報〕の「曲目解説」に取り上げられている。そして、レコード発売２ヶ月後の昭和６年６月19日にはNHK熊本「GK開局三周年記念特別放送」に単独で出演する機会を得たことが、『九州日日新聞』（1931年６月19日，朝刊４面）で確認できる。また、愛八がこの放送に出演するために、事前に長崎商工会議所事業課によって作成されたプログラムが、長崎歴史文化博物館に所蔵されていたことが、筆者の調査で明らかとなった（安原, 2019）。昭和８（1933）年のNHK長崎放送開局時は、愛八は所属していた長崎東検番の一員として出演している。昭和８年12月に愛八は亡くなるが、この２年間に個人としてもメディアに取り上げられる機会を得ている。

凸助は、昭和５（1930）年にレコード化した時は30歳頃であったが、所属していた町検番が、芸妓に必要な伝統芸能の修行に力を入れている中で頭角を現した代表的芸妓である。昭和８年のNHK長崎放送開局時は、町検番の一員として立方で出演している。そして、「NHK長崎放送局開局直後、長崎から東京までその土地々々の民謡をリレー放送したさい、同じく町検番所属で昭和５年のレコード録音時に三味線を弾いた一二らとともに「長崎甚句」を放送する。昭和９（1934）年３月に開かれた長崎観光博覧会の演芸館（長崎市中之島）では長唄の新曲「阿蘭陀万歳[12]」の才蔵を演じた」（宮川，2006：181-182参照）。ただ、凸助が吹き込んだレコードの資料がほとんど残されていない。しかし、実際に凸助は、戦後は名取として後進の指導を行い、長崎「くんち」の本踊りの指導者として活躍することで、地域の伝統芸能の継承に貢献している。

５．おわりに

長崎の「ぶらぶら節」は、昭和５（1930）年に大阪朝日新聞連載の「民謡の旅」の取材を機として西條八十との接点をもち、その記事によって、新聞の販売エリアである西日本の人びとに紹介されることとなった。昭和５年の取材記事とレコード発売は、それ以前に「やだちゅう節」の替唄として扱われていた「ぶらぶら節」が、１つの独立した唄となった時期であると言えるであろう。

また、「長崎ぶらぶら節」のレコードが発売される直前に西條一行が長崎取材で出会った芸妓は、最初にレコードを発売した凸助であり、次に発売した愛八ではなかったことが、本論で明らかとなった。そして、昭和６（1931）

年に愛八による「ぶらぶら節」がビクターから発売され、その〔月報〕と称される新譜目録の曲目解説に掲載されたが、そこには愛八の写真とともに、「ぶらぶら節」の紹介文として、西條八十の著書『民謡の旅』の「長崎のぶらぶら節」から一部が用いられた。上記のように、「民謡の旅」で取材の対象となったのは凸助であったが、ここで凸助と愛八の演奏が区別されずに曲目解説に紹介文が用いられたことで、その後、「ぶらぶら節」の歌い手として愛八が記憶される一因に繋がることとなったと考えられる。

しかしながら、本論では言及していないが、二人の歌い手の演奏には大きな相違があり、「ぶらぶら節」の担い手として愛八が記憶されてゆくが、平成11年から長崎県民謡協会主催で行われた「ぶらぶら節」のコンクールでの演奏の規範としては、凸助流の演奏が採用されている。この点については稿をあらためることとしたい。

【注】

1　凸助：長崎町検番に所属する芸妓。「本名は山本多満。長崎町検番所属。明治31（1898）年早岐に生まれ、幼い時に長崎市新橋町の料亭「一力」の養女となる。「一力」の二代目女将山本キンは、凸助を常磐津家元で立三味線の名人・三蔵に内弟子として預け修行させる。（中略）太平洋戦争による検番廃止と同時に芸者をやめ、新橋町で常磐津と花柳流舞踊の師匠一筋に生きた」（宮川，2006：182）。

2　一二：「長崎町検番に所属し、料亭「一力」の女将山本キンに芸を仕込まれた優秀な芸妓の一人。凸助より一周り年長で、昭和５年のレコードでは凸助の伴奏をつとめ、一二も凸助の三味線で「長崎甚句」を吹き込んでいる」（宮川；長崎新聞社編，1975：29-30）。

3　愛八：長崎東検番（丸山）に所属する芸妓。「本名は松尾サダ。明治７（1874）年10月23日、西彼杵郡日見村（現長崎市網場町）に生まれる。丸山東検番所属。長唄、清元、常磐津、端唄など広いレパートリー。相撲が好きで、東京大相撲の長崎興行の際は“木戸御免”だった。貧しい学生には財布ぐるみ投げ出すなどの逸話が知られるが、自分自身は貧乏暮らしが続いた。昭和８（1933）年12月30日に生涯を閉じる」（宮川，2006参照）。

4　俚謡：日本の社会で、主として日常生活のなかで愛唱される歌謡。芸術的な音楽とされる邦楽作品ではなく、民謡、わらべうた、民俗芸能や年中行事に付随する歌、流行歌、俗謡、門付け歌、などの総称。1914（大正３）年、当時の文部省は、全国からこの種の歌謡を収集し、《俚謡集》として刊行。同書に収集された歌の種類が、この範疇となろう（樋口，2002）。

5　宮川密義：1933（昭和８）年長崎県南有馬町生まれ。昭和27年長崎民友新聞社入社、34年合併により長崎新聞社。学芸部長、編集局次長、論説委員、編集アドバイザー。2006年長崎中央公民館「うたの長崎学」研究会講師、県すこやか長寿大学専門課程講師、同校同友会「歌で巡る長崎の会」ほか講師。長崎ペンクラブ会員、長崎県民謡大会審査委員長、長崎ぶらぶら節全国大会審査員（宮川，2006参照）。

6　古賀十二郎（こがじゅうじろう1879年-1954年）。長崎市本五島町に生まれる。長崎市立商業学校を卒業後、東京外国語学校に進学する。広島中学の英語教師を３年勤め、郷里長崎に戻り、長崎研究に洋書研究を取り入れるという新分野を拓く。明治の末年に長崎県立図書館設立を進言し、実現させる。長崎市史編纂事業が始まると編纂主任となり、『長崎市史風俗編上・下』（古賀；長崎市役所編，1925）を完成させる。外国文献にも取り組んだ。旧蔵書の一部と、原稿全部は、長崎県立図書館古賀文庫に収められている（永島，1997：75-80参照）。

7　本山桂川（もとやまけいせん1888年-1974年）：民俗学者、長崎市に生まれる。本名は豊治（とよじ）。桂川は、民俗学の草創期から確立期にかけて民俗資料の収集と整理に貢献した民俗研究家で、南方熊楠や柳田國男、折口信夫らとほぼ同時代に活躍した（市川市立図書館データベース参照：2015年12月15日）。

8　盂蘭盆：現在の長崎市の盆の時期と１ヶ月の違いがあるが、長崎県立図書館のレファレンスによると「昭和５年は７月13日から15日にかけて行われており、昭和27年に変更され、８月13日から15日となった」（長崎県立図書館レファレンス，2014）。

9　昭和５年６月28日長崎日日新聞３面「丸山花月の家宝展覧会」という記事に、花月が人手に渡ろうとしていることが記載されている。西條八十が長崎を訪れたのは同年７月９日でありこの事実を把握している。

10　永島正一：大正元年（1912）－昭和62（1987）年74歳。元長崎県立長崎図書館長。図書館勤務38年。その間、古賀十二郎に師事。郷土史家。昭和28（1953）年のNBC放送開局以来、ラジオで郷土史をつづる「長崎ものしり手帳」を担当。放送回数１万回に及ぶ（永島，1997：奥付参照）。

11　渡邊庫輔（1901年―1963年）：長崎の郷土史家。長崎県立図書館の郷土課に約3500冊の渡邊文庫がある。芥川龍之介、齋藤茂吉に師事。愛八との繋がりが大きかった古賀十二郎（注６）の弟子でもある。

12　阿蘭陀万歳：昭和８（1933）年８月東京での「花柳舞踊研究所」第16回公演会が初演。福地信世立案、町田嘉章作曲、二代目花柳寿輔（のちの花柳寿応）振付、万歳を花柳三之輔、才蔵を花柳寿太郎が踊っている。この新作を翌年には町検番の演目として長崎で披露することになる。東京の舞台で才蔵を踊った花柳寿太郎は当時長崎町検番の専属師匠だった（大田，2007：下線筆者）。

【参考文献】 著者名アイウエオ順

上村，直己
2003『西條八十とその周辺』東京：近代文芸社.
大田，由紀
2007「長崎町検番・凸助（山本タマ）」『長崎の女たち』第２集，長崎：長崎文献社：43-58.
大西，英紀
2011『SPレコードに見る　日蓄―日本コロムビアの歴史』京都：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター.
金，志善（編）
2019『京城日報音楽関連記事・廣告目録集』=경성일보 음악관련 기사 · 광고 목록집 : 1909-1945 : 民俗苑.
倉田，喜弘
1992『日本レコード文化史』東京：図書印刷株式会社.
2001『はやり歌の考古学』東京：文藝春秋.
2002『近代歌謡の軌跡』東京：山川出版.
古賀，十二郎；長崎市役所（編）
1925『長崎市史　風俗編　上・下』長崎：長崎市役所
1981『長崎市史　風俗編　上・下』復刻版, 大阪：清文堂.
古賀，十二郎（著）；永島正一（校注）；長崎学会（編）
1968『丸山遊女と唐紅毛人 前編』長崎：長崎文献社.
1969『丸山遊女と唐紅毛人 後編』長崎：長崎文献社.
1995『新訂 丸山遊女と唐紅毛人（前・後編）』長崎：長崎文献社.
西條，嫩子
1975『父 西條八十』東京：中央公論社.
西條，八十
1930『民謡の旅』大阪：朝日新聞社.
1993「民謡の旅」『西條八十全集14』（童謡・歌謡・民謡論）東京：国書刊行会：255-256，302-320，335，359-365.
長崎女性史研究会（著）；長崎文献社編集部（編集）
2007『長崎の女たち』第２集，長崎：長崎文献社.
永島，正一
1972『長崎ものしり手帳』長崎：長崎放送.
1997『長崎ものしり手帳』（再編集版）福岡：葦書房有限会社.
日本ビクター蓄音機株式会社（編）
1931「ビクター・レコード（日本物）第三十八回新譜目録（昭和６年５月）」『ビクター・レコード音譜目録（昭和６年）［月報］』日本ビクター蓄音機.
1932「ビクター・レコード（日本物）第四十四回新譜目録（昭和６年11月）」『ビクター・レコード音譜目録（昭和６年）［月報］日本ビクター蓄音機.
日本放送協会（編）
1965『日本放送史　上』東京：日本放送出版協会.
1977『日本民謡大観九州篇（北部）』町田佳聲（解説），東京：日本放送出版協会.
樋口，昭
2002「俚謡」海老澤敏；他（監）『新編音楽中辞典』東京：音楽之友社.
深潟，久；長崎新聞社（編）
1969『ながさきの民謡』長崎：謙光社.
町田，嘉章
1950『ラジオ邦楽の鑑賞』東京：日本放送協会.
町田，嘉章；浅野，建二（編）
2004『日本民謡集』（ワイド岩波文庫）東京：岩波書店.
宮川，密義；長崎新聞社（編）
1975『長崎の歌謡史』長崎：長崎新聞社.

宮川，密義
2000「「長崎ぶらぶら節」と二人の芸妓」『ら・めえる』第41号pp.6-15：長崎：長崎ペンクラブ.
2006『歌で巡る長崎』（長崎県の歌謡史）長崎：長崎新聞社.
本山，桂川
1927『長崎花街篇』東京：春陽堂.
安原，道子
2016『長崎ぶらぶら節研究―お座敷唄から長崎くんちの演目へ―』お茶の水女子大学修士論文.
2019『長崎の芸妓、愛八の音楽活動―昭和６（1931）年における長崎の「ぶらぶら節」レコード化以降』お茶の水音楽論集第21号印刷中.
山下，寛一（編集・発行）
1950-1995『諏訪御神事奉納踊』番付，長崎：株式会社呂紅.

【ウェブサイト】

市川市立図書館データベース
http://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1062.html html, 2019年８月31日アクセス.
長崎検番ホームページ
http://www.geocities.jp/nagasakikenban/page010. html, 2015年12月15日アクセス.
《俚謡集》国立国会図書館デジタルコレクション
（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879145），2019年10月30日アクセス.

【録音資料】

凸助（唄）・一二（三味線）「長崎ぶらぶら節」
昭和５（1930）年９月，ニッポノホン盤（ニポ17633）：宮川密義氏 より音源提供.
愛八（唄及び三味線）「ぶらぶら節」
昭和６（1931）年２月（録音），ビクター盤（ビ51665）：宮川密義氏より音源提供.

【新聞】

『京城日報』
昭和５（1930）年９月５日夕刊、昭和10（1935）年11月30日.
『九州日日新聞』
昭和６（1931）年６月19日朝刊，４面.
『長崎新聞』
昭和６（1931）年６月19日朝刊，５面.
昭和７（1932）年11月.
昭和８（1933）年９月20日－９月24日，11月，12月.
昭和10（1935）年１月.
『長崎日日新聞』
昭和５年２月９日-7月13日.
昭和６年２月１日-2月22日.
『大阪朝日新聞』
昭和５年６月30日-8月４日朝刊，１面.

【現地調査】

史蹟料亭「花月」2014年９月４日.
長崎歴史文化博物館2019年７月21日最終来館.

【宮川密義氏と筆者のメール】

2015b：2015年 3 月23日.